



Title	<Book Review>David Swartz, "Symbolic Power, Politics, and Intellectuals: The Political Sociology of Pierre Bourdieu", Chicago:University of Chicago Press, 2013
Author(s)	中谷, 開哉
Citation	年報人間科学. 2017, 38, p. 235-240
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60463">https://doi.org/10.18910/60463</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 〈書評〉

**David Swartz,*****Symbolic Power, Politics, and Intellectuals: The Political Sociology of Pierre Bourdieu,***

Chicago: University of Chicago Press, 2013.

中谷 開哉

## はじめに

本稿ではD. Swartzの著書、*Symbolic Power, Politics, and Intellectuals*を紹介する。Swartzはボストン大学で博士号を受け、現在はボストン大学社会学部で助教授を務めている。彼の研究領域はエリート論、階層論、教育社会学、文化社会学、そして宗教社会学にまで及び、その理論的枠組はほぼ一貫してP. Bourdieuのものに準拠している。

Swartzの初期の著書である*Culture and Power*は、Bourdieuの人物像および思想を包括的にとらえる試みであり、いわば入門書としての性格が強いものとなっている。しかしそのタイトルにみられるように、彼の主要な関心は「権力」にあり、それがSwartzによるBourdieu論の特徴であるといえる。キャリア前期および中期が特に注目されるBourdieuの理論に加え、後期の政治的介入にあった背景を視野に入れつつ、Bourdieu社会学の枠組を各連字符社会学、特に政治社会学に適応できるものとして捉えなおす、というのが本書のスタンスである。

今までBourdieuがあまり参照されてこなかった分野が見識を広げることだけではなく、文化社会学や教育社会学が他の分野との相互依存関係を認識し、再帰的にそれぞれを発展させることにも本書は一役買うことになるであろう。

## 構成

第1章「政治社会学者としてのBourdieu」では、いかにBourdieuが政治社会学者として捉えられるかを示している。米国における、極端に専門化されたアカデミックの場では、Bourdieuの広範な見識は十分に理解されていない。米国政治社会学界へのBourdieu社会学の適用は、当書の戦略的な目的の1つであるといえる。

第2章「Bourdieu社会学における権力の諸形態」では、権力と支配を分析対象とする際にBourdieuが用いた「資本の諸形態」「権力の場」「象徴権力・象徴暴力・象徴資本」といった概念装置が示される。

第3章「資本および権力の場」においては、「場」と「資本」の概念整理をしつつ、政治的側面におけるその作用が示される。

第4章「象徴権力の社会学」では、「象徴権力」に対するBourdieuの見解が示されている。社会的ヒエ

ラルキーの構成・維持・変化に寄与する源泉を探るため、象徴権力・象徴暴力・象徴資本が取り上げられる。

第5章「Bourdieuの国家分析」では、Bourdieuの国家に対する見識を探っている。彼の国家分析は、象徴権力、差異化への闘争、場の分析など、文化社会学的文脈から抽出されたものを通して位置づけられる。

第6章「象徴権力の知識政治」では、社会学者の政治的役目に対するBourdieuの規範的な見解が示される。Bourdieuは象徴権力・象徴暴力を批判的に可視化する科学として社会学を位置づけている。社会学が政治的闘争に関わる際、社会学が科学足りうるためにいかなる立ち居振る舞いをすべきか、Bourdieuの私見を探っている。

第7章「批判社会学と公共知識人」では、様々な公共的介入を通じてBourdieuがいかに彼の見解を実践に移してきたかを辿る。この章では彼のいう「コミットする学問」という戦略が評価される。

第8章「民主政治のために」では、社会変動に関するBourdieuの見識を検討している。彼は社会変動に関する明確な理論を打ち出さなかったが、彼が提示する理論的枠組には、社会変動論を考慮に入れるための余地が残されている。そして再び社会学と政治学の関係性に関する議論に注目し、民主政治に対するBourdieuの見解を探っている。

### 価値の源泉としての権力

Bourdieuの社会学において、権力は価値の源泉として現れる。彼の言葉でいうとすなわち「資本」であり、おおよそ経済資本、文化資本、社会関係資本、象徴資本の4つに分類される。Bourdieuにおける資本は、社会的関係性を強調する点でK. Marxの資本概念と共通しているが、Bourdieuは経済を下部構造、文化を上部構造と捉える見方を否定しており、彼のいう資本が様々な形態をとるという点で、両者の概念は区別される。Bourdieuは「資本」という経済的な語彙を使用しているが、Swartzはその理由を3つ挙げている。

1つ目は、たとえば個人の能力に還元できるものとして捉えられる社会的地位や資格などが、実は社会的ヒエラルキーを伝達する媒体であることが「文化資本」概念の導入によって示されたように、人々があまり関心を寄せてこなかった前提を修辞学的に明示する効果が経済的用語法にはある。2つ目は、Bourdieu自身が発展させた実践の理論に関係している。経済的实践では投資、交換、集積が対費用効果の計算を基に行われているが、他の実践を考慮する際、更に広範な視点が必要となってくる。すべての実践は物質の意識的な勘定だけではなく、暗黙的で物質に還元されないモノの集積を含む。その暗示としてBourdieuは経済的用語を活用した。

そして最後に、Bourdieuは経済的用語を、概念的・理論的戦略としてだけでなく、彼の経験的研究に基づいて使用している。アルジェリア戦争中の現地調査で、Bourdieuは当地の経済市場に新自由主義的経済モデルの根底部分を見ていた。しかし彼はその経済的側面だけではなく、それによって波及した各側面における権力構造にも注目しており、それが経済の延長上に存在する（しかし経済に完全には還元されない）ことを示すために、「資本」という用語を使用したと考えられる。アルジェリアでの経験がBourdieuの理論的立場を定めたのみならず、後期の政治的介入に多大な影響を与えたことは第7章で詳しく述べられている。

### 「場」における権力

商品、サービス、知識や地位などの生産・循環・調整が行われ、行為者がその集積と占有を求めて自己を位置づける領域を Bourdieu は「場」と呼ぶ。「場」における闘争には2つの側面が存在する。1つ目は、複数の「場」内での分配が原因となるもので、より価値のある資本形態を集積するための闘争、あるいは特定の形態の資本を、より価値のある資本形態に転化するための闘争がこれにあたる。2つ目は、特定の「場」において、ある形態の資本に「正統性」を付与するための闘争である。つまりこれは「象徴資本」の獲得を通じて「象徴権力」を求める闘争である。

そして近代社会における権力の分配がいかに行われているかを考える際、すべての「場」の中で、Bourdieu が中心的なものとして捉えていたのが「権力の場」である。Bourdieu は「権力の場」を「種々の権力形態がどのように関連しあっているか、その状態によって構造的に決定される力の場」と定義しており、つまり「占有と社会的な力を保証する社会的地位の間の関係、権力の占有を求めての闘争に参加するために必要な資本の関係を意味する」(Bourdieu, 1992)。このように、「権力の場」という領域で行われる闘争、それは「象徴資本」を求めて行われるものであるが、Bourdieu は、そこで中心的な役割を担い、「象徴資本」を集積している組織こそ「国家」であるという認識を示している。

### 正統化における権力

Bourdieu は象徴権力・象徴暴力・象徴資本という用語を使用した。これは権力を語る上での特定の文脈を想定してのことであった。Swartz は伝統的な政治社会学が想定する権力を以下の4つに類型化している。1つ目は身体的抑圧や脅威として現れる物理的な力、2つ目は競合する利害の間に見られる紛争、3つ目は議題設定による非意思決定的な力、そして4つ目が思想統制である。Bourdieu の用語は3つ目と4つ目の権力に対応している。象徴権力の作用する支配関係において、服従者はそれを非意思決定的に受け入れることがあり、そのためには、一種の「正統性」がその権力には必要となる。その正統性を権力に賦与するための闘争が、象徴資本の獲得を通じて行われるのである。なお、象徴資本が集約される組織として、Bourdieu は国家を想定していた。

「正統化」という言葉を使用した思考の背景には、明らかに M. Weber の影響がある。Weber は正統的支配に関して、合理的支配、伝統的支配、カリスマ的支配の3類型を提示した。それぞれ「服従者側における利害得失の目的合理的考量」「習い性となった行為に対する無反省な慣れ」「被支配者の単なる個人的な好み」が動機となって形成される正統性である (Weber, 1922)。Swartz は、Bourdieu の「象徴権力」は特に「カリスマ的支配」を想定したものであると考えているが、Weber の「習い性となった行為に対する無反省な慣れ」という定義に従うと、Bourdieu 社会学の問題意識は「伝統的支配」にも対応しているといえる。

Bourdieu の視点は「象徴権力は単に「象徴的な」ものである」という一般的にとらえ方に対峙するものである、と Swartz は繰り返し述べている。その Bourdieu の挑戦が実践として現れたものの1つとして、彼の政治的介入は位置づけられるだろう。

### 「コミットする学問」

SwartzはBourdieuの「コミットする学問」という立場において、4つの特徴を見出している。1つ目に、現存するすべての権力に対して「無慈悲な批判」を与えているということ。社会学は単なる娯楽でも、地位達成のフィールドでもなく、さらに言うところと厳密な意味での知的冒険でもない。Bourdieuの社会学は「知識の為の知識」では決して有り得ず、無自覚な前提や既存権力の正統性に対峙する批判的な側面を持ち合わせている。

2つ目に、Bourdieuはその批判をある政治組織などに特定して行ったり、政治的なポストに就いたりしなかった。政治的なポストに就くことで、直接的な統制が行われずとも、統制を行う制度を形成する一助となってしまう、と彼は考えた。

3つ目に、批判が行われるに際して、Bourdieuは自身が専門とする領域にのみ焦点を当てていた。これはJ. P. Sartreの「全体的知識人」という概念と対立する。「全体的知識人」モデルは、学問領域や社会的地位、政治参加度の垣根を越えられる知識人を前提としており、その中でも専門外の領域で政治的問題に対する発言を行う点は、Bourdieuのスタンスとは対立している。Bourdieuによる知識人像は、「全体的知識人」に対し、「集合的知識人」として特徴づけられる。

そして最後に、Bourdieuの批判的立場において、科学の自律性、より一般的には知的「場」の自律性が確立されていることが前提となる。彼は公共の場において社会学が信頼を得るために、象徴資本でもって正統性を得ることが必要だと考えていた。彼がキャリアを通じて常に意識していたのは、政治的側面からも経済的側面からも歪曲されない知的生活の自律性であり、それによって象徴資本を得られるであろうと考えていた。

先ほども述べたように、Bourdieuは象徴権力・象徴暴力を批判的に可視化する科学として社会学を位置づけているが、政治的介入を自らが行うに際しても象徴権力の獲得を戦略的に用いていた、と解釈することもできよう。

### 社会変動について — Swartz の見解およびふたたび再生産理論の文脈へ—

では、Bourdieuは「象徴権力」及びそれらに附随する概念を用いて、政治的介入の結果として期待される社会変動をどのように位置づけていたのだろうか。文字通りに解釈すると、Bourdieuが初期の教育社会学の文脈で主張した「再生産」という用語は「変動」を含意しないし、それに対する批判も存在する。たとえばR. Jenkinsは、Bourdieuの社会学的枠組には客観主義と主観主義の対立を弁証法的に超越する試みが根底に潜んでいるが、客観的構造が実践を形成する文化を生産し、その構造自体を再生産する、とされる点において、なおも決定論的・循環的な枠組であると批判している(Jenkins, 1982)。しかしSwartz自身はBourdieu社会学において社会変動を考慮に入れることは可能であるとしている。

たとえば諸個人の相互依存関係が複雑になることが社会変動を促す、というN. Eliasの図式を受け、Bourdieuは近代社会において「場」の数が増えることによって権力を求める闘争が差異化・複雑化し、それが国家権力に対する闘争を推し進めると考えた。なお、BourdieuはE. Durkheimの「機械的連帯から有

機的連帯へ」という見通しからも影響を受けており、「自律的な「場」が増大し、「権力の場」が多様化するにつれ、政治的無関心状態や機械的連帯からの移行が発生し」、「有機的連帯によって各「場」や権力が多様でありながら相互依存的な統一性を保持するようになる」(Bourdieu, 1992)と述べている。社会の分業化とそれに付随する「機械的連帯から有機的連帯へ」の変化、そしてそこにみられる文明化過程を独自の概念に当てはめて述べたという点において、Swartzがいうように、Bourdieu社会学の変動論への適応可能性は存在すると考えられる。

以上のような文脈でSwartzはBourdieu社会学における社会変動論への適応可能性を見ていたが、やはり再生産理論そのものへ焦点を当てると、その余地はあまり存在しない。しかし、Swartzは当書ではあまり触れていないが、Bourdieuのいう「ヒステリシス」は、再生産理論の中で、ハビトゥスその他の変容という文脈で語られたという点において、注目すべき概念である。

ヒステリシスとは、もともとは「履歴効果」を意味する物理学用語である。Bourdieuはヒステリシスについて、以下のように述べている。「ハビトゥス構造の再生産がおこなわれる社会状況に内在するヒステリシスは、社会的機会と各性向の間に発生する遅滞であり、個人が社会的機会を得られなくなる原因、そして歴史的危機を認識と思考のカテゴリーにおいて理解することができなくなる原因となっている」(Bourdieu, 1972)。例えば特定の社会的状況が、ハビトゥスに対する性向の内面化が行われた当初の状況と同じであれば、ハビトゥスによる実践の再生産は当該の状況に沿って行われる。しかし、ハビトゥスは特定の状況を内面化する際、過去の経験をそこに介せずにはいられない。よって、顕著な社会的状況の変動があった際、どうしても「履歴」が残ることになるのである。

以上のような図式を考慮すると、ヒステリシス概念は、主観主義と客観主義の弁証法であるだけではなく、社会変動論と社会システム論の弁証法への扉を開けるものであるかもしれない。Bourdieuは構造主義を批判しつつも構造主義的な理解がなされてきたが、このような複雑な思考がその齟齬の原因となっていたのだろう。

Bourdieuにおけるヒステリシスは、Marxにおける「疎外」やDurkheimにおける「アノミー」などのように道徳的判断を包含せず、特定のオルタナティブを前提としている概念でもない。それに対して客観主義的であるという評価を下すことも可能ではあるが、Bourdieuが述べた「学問の自律性」を踏まえると、社会学が科学としての純粋性を守りつつ、静的・動的な視野双方の有用性を存分に発揮できる枠組をわれわれに与えてくれる。Swartzは当書において、Bourdieuの規範的な見解を示そうと試みているが、純粋に理論的な部分にも潤沢な示唆が含まれていることは確かである。Bourdieuが使用した概念であるハビトゥスやそれに影響を与える象徴権力、そしてその着想から派生したであろう「コミットする学問」という彼の社会学観には、独立性と相互依存性の両側面に対する関心が含まれており、双方が存在して初めて社会学の自律性は保たれる。そこに決定的な要素として存在する「批判的な見識」というものが社会学の真骨頂であることを決して忘れてはいけない。

## 参考文献

- [1] Bourdieu, P., 1972, *Esquisse d'une théorie de la pratique, précédé de trois études d'ethnologie kabyle*, Geneva: Droz.  
(=Nice, R (trans.), 1977, *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge: Cambridge University Press.)
- [2] Bourdieu, P., 1992, *La noblesse d'état: Grandes écoles et esprit de corps*, Paris: Les Editions de minuit. (=Clough, L. C. (trans.), 1996, *The State Nobility: Elite Schools in the Field of Power*, Stanford, CA: Stanford University Press.)
- [3] Jenkins, R., 1982, "Pierre Bourdieu and the Reproduction of Determinism", *Sociology*, 16(2), 270-281.
- [4] Swartz D., 1997, *Culture and Power: The Sociology of Pierre Bourdieu*, Chicago: The University of Chicago Press.
- [5] Weber, M., 1922, *Wirtschaft und Gesellschaft, Grundrisse der verstehenden Soziologie*, Tübingen: Mohr Siebeck. (=1960, 世良晃志郎訳『支配の社会学 I』創文社.)